

国語学史

佐藤宣男

一、単行本

まず、大著、尾崎知光『国語学史の基礎的研究—近世の活語研究を中心として—』（笠間書院 58・11）を取り上げよう。これは七〇九ページの大部のもので、副題にあるように、近世の活用研究が中心となる。即ち本居宣長、宣長周辺の人物としての富士谷成章・柴田常昭・春原元彦・鈴木腹、本居春庭・義門、富樫広蔭らの用言の活用の研究が精緻に展開される。その学説の完成された姿を捉えるだけでなく、初期の段階からの生成過程を明らかにすることも充分意を用い、そのことが新資料への心配りとなつて現れている。昭和三十一年五月発表の論文（国語と国文学）から昭和五十八年六月発表の論文（文莫 八号）までの、既発表の論文二十八編を基に、四編の論文を加えて編纂したもので、そのうち、「富士之山文」について（

四章三節）、「活語トマリモシノ説」の紹介・翻刻（五章三節）、「富樫広蔭の未知の著書について」（七章七節）は資料の翻刻・影印であり、第八章「詞八衢」に関する資料」は、初稿本の影印・翻字である。

根来司「時枝誠記研究 言語過程説」（明治書院、昭60・5）は意欲

的な著述である。時枝の国語学における全業績を明らかにしようとするだけでなく、源氏物語研究などの国文学に関する発言や懸詞といった、文学の修辭に関わる問題、および国語問題、国語教育の問題をも幅広く含めた研究である。卒業論文にはじまり、それらの研究が発展していく様を時の流れに沿つて捉えることができるような工夫もなされている。時枝とほぼ同年代の池田亀鑑、吉川幸次郎の学問のあり方との対比の中で見ているのも興味深い。最後に付された時枝の「著者論文総目録」も有益である。

竹岡正夫編『国語学史論叢』（笠間書院、昭57・9）以後、論叢と略称）は二十編の論文・翻刻等から成る。個々の論文については、後に雑誌論文の中に入れて取り上げるので、ここでは国語学史に直接関わらない、東辻保和「高松宮御蔵河内本源氏物語の濁点付語詞について」に簡単に触れておこう。本論は、この資料の中の自立語を取り上げ、濁点付語詞を通して本資料の性格の素描を行うものである。中世語的様相を中心に、語彙研究の面で注目される。塚原鉄雄「生川正香の芭蕉文法—翁発句助辞一覽—」、竹岡正夫「資料翻刻」脚結変例」は、それぞれの資料の翻刻である。

『研究資料日本文法』全十巻（明治書院、昭59・3〜昭60・4）は、

①品詞編体言編 名詞・代名詞、②用言編 (一) 動詞、③用言編 (二) 形容詞・形容動詞、④修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞、⑤助辞編 (一) 助詞、⑥助辞編 (二) 助動詞、⑦助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典、⑧構文編、⑨敬語法編、⑩修辭法編から成り、構文論・修辭法を含めているところに特徴をうかがうことができる。各巻末に付されている資料は便利であるが、利用するものは、原典にも当る努力が求められよう。

二、雑誌論文等——文法——

江戸期以前の文法研究について見ると、まず、品詞分類に関するものとして、A飯田晴巳「竹園抄の国語学史上の位置」(『甲子論集』—林巨樹先生華甲記念国語国文論集』同刊行会編 武蔵野書院 昭60・4)、B中山緑郎「『名語記』の文法意識」(『立教大学日本文学』54 昭60・7)、C糸井通浩「『体用』論と『相』——連数字における——」(論叢)がある。Aは「竹園抄」の「てにをは」と「物の名」・「詞の字」との対立的認識について、その前後の諸書との比較において位置づけ、Bは「名語記」の文法意識、その国語学史上の位置について、主に用語(名・詞・テニハ、体・用)の検討を通して考究する。Cは後の品詞分類に継承される体・用の問題を連歌論書を資料に取り上げ、体言・用言の捉え方とのずれを相との関連で考察している。

テニラハについて、D根来司「てにをは研究史の一問題」(論叢)は、てにをは研究が南北朝時代に起り、発達した由因を、その時代の趨勢(和歌の生命の弱まり)に求め、E根上剛士「連歌てにをは書と手爾葉大概抄」(『東洋大学「日本語研究」1、昭60・5)は「連歌諸軌秘伝抄」(一四八二年頃成立)などと「手爾葉大概抄」との比較を通

して、「大概抄」の成立を、これらの連歌論書成立より後、室町中期とする。

近世関係のものでは、富士谷成章について、F竹岡正夫「打合研究小史」(『香川大学国文研究』8、昭58・9)、G同「『伏や』研究小史——成章を経て宣長まで——」(論叢)、H同「富士谷成章の学説と表現観」(『国語学』133、昭58・6)、I尾崎知光「富士谷成章の周辺についての覚書」(論叢)、J新川正美「『あゆひ抄』の『返状』について」(香川県高等学校国語教育研究会『国語』36、昭58・11)、K同「『挿頭題』の語学的背景について——特に漢語文典との関係など——」(論叢)、L佐田智明「助字詳解とあゆひ抄——淇園の助字の扱い方をめぐって——」(論叢)がある。Fは成章のいう「打合」(呼応関係)について、「手爾葉大概抄」から「あゆひ抄」(『詞の玉緒』までの資料を通して、その捉え方を概観し、「見ゆ」どめ、係辭「なむ」などにも触れる。Gは「なれや」など、已然形に「や」の付属する形を成章・宣長までのテニラハ研究史の中で詳細に跡付けたものである。Hでは成章の学説の特色と伝統的テニラハ研究との関連を明らかにするために、(1)接続助詞「て」について、「あゆひ抄」までの主要な説を通観し、さらに、(2)成章の学説の根底にある表現過程観を「旨・趣」を中心に解明する。Iは宣長と成章との接点にいた人物としての谷川土清らの存在に言及し、さらに成章の文法学説の出発点となった旧来の「てにをは」学説の再吟味が国語四分類説を産み、漢語学の知識によつて裏打ちされていったものと推測する。Jは「返状」と「在状」との関わり、成章のいう「かへし」・「末・靡なし」の意味内容を検討し、竹岡正夫説の優位性を主張する。Kは「挿頭題」の五つの項目を皆川淇園の「太子公助字法」などと対比して考究し、Lは淇園「助字詳解」

における助字（而・者・矣・也など）とそれに対比されるテ・ハ・カなどについての記述を取り上げ、それに相応するあゆひ抄の記述と比較して、両著の間の共通点・相違点を論ずる。K、Lには漢文法との対比という視点が特徴的であるが、M佐藤宣男「漢語文典とテニヲハ——『訳文箋蹄』『訓訳示業』を中心に——」（論叢）も、国語におけるテニヲハ研究の背景をなすものとしての、漢文法での助字のあり方を致生徂徠の「訳文箋蹄」などを中心に述べ、中・近世のテニヲハ研究との対比を行っており、漢文法との関わりに着目する。佐藤には「近世における漢文法研究とテニヲハ研究——河北景植『辞辨』を中心に——」（藤女子短大紀要）22—1、昭60・1）、「助語とテニヲハ——毛利貞章『訓訳助語辞解大成を中心に——』（福島大学『言文』33、昭60・12）もある。

本居宣長関係では、N徳田政信「宣長語学の特色と『詞玉緒』の文法観——呼応の脈絡文法の集大成——」（中京国文学）3、昭59・3）、O佐藤稔「『詞の玉緒』の背景」（論叢）、P同「古今集和歌助辞分類」と本居宣長」（秋田大学教育学部研究紀要）人文科学・社会科学 35、昭60・2）、Q有馬煌史「夕の追風」における□の意義について（論叢）がある。Nは伝統的な、テニヲハを文ないし文章の流れ・断続などの指標（目じるし）と捉える考えを踏まえて「詞玉緒」が成り立つものとし、それは伝統的なテニヲハ学の集大成、純日本式の文論であり、分析的方向をとった成章とは好対照をなすと述べる。Oは「詞の玉緒」の背後に看取される「八代集抄」、「春樹頭秘増抄」、「古今集和歌助辞分類」との関わりを論じ、Pは「慢識」を資料に宣長と「古今集和歌助辞分類」との関わりを扱っている。Qは「にをはず紐鏡」の別稿といわれる「夕の追風」の□に着目し、本居宣長記

念館所蔵の「詞の玉緒稿」における□の取り扱い方を検討することを通して、今日の助動詞「き」の扱い方に疑問を提起する。

宣長などの、国学者達の古典解釈の中に何うことのできる文法上の問題も、近年注目されているところであつて、R山口明穂「江戸時代における古典解釈と言語意識」（東京大学文学部研究報告7 昭和五十六年語学文学論文集）昭57・3）は江戸時代の国学者たちの古典解釈にうかがえる言語意識の問題を、修飾・被修飾の関係、特に格機能にかかわる問題を主格機能を中心に捉え、国学者たちの持つ意識と古典語に見られるものとの間にある差異を探り、S同「江戸時代における已然形把握の一形式」（論叢）は「古今集遠鏡」の俗言解の検討を通し、已然形から仮定形への変遷の過程を推測している。

T山根木忠勝「玉あられ」から「遠鏡」へ（大阪大学『語文』40、昭57・11）は宣長が「玉あられ」で示した詠話の方式を「遠鏡」にも見て、その具体相に触れながら、そこに宣長の教育者としての姿勢を見る。山根木には、U「本居宣長における助詞『のみ』の把握」（活水論文集）28 日本文学科編、昭60・3）もある。V高瀬正一「古今集遠鏡」に於ける推量の助動詞について」上・下（愛知教育大学『国語国文学報』40、41、昭58・3、59・3）は同書の例言に留意しつつ、同時代の口語訳資料としての「あゆひ抄」と比較し、両者の理解の異同、推量の助動詞全体の訳文体系について論述したもの、W同「詞の玉緒」に於ける「らむ」について」（国語国文学報）39、昭57・3）は「詞の玉緒」にいう「かなの意に通ふらむ」を取り上げ、顕昭の「顕注密勘」などとの関わりに触れる。北澤尚にもX本居宣長の助動詞「らむ」の理解をめぐって（国学院大学『国語研究』46、昭58・1）という論述が見られる。Y高瀬正一「宣長門流における時の助動詞の継承

について——衣川長秋「百人一首箋梯の場合——」（『国語国文学報』42、昭60・3）は同書の、「古今集遠鏡」の訳の継承のしかたに視点を当て、その共通点・相違点を、時（過去・完了）の助動詞を素材に考察するものである。

雑誌論文等——文法口——

宣長以降のものについては、本居春庭に関する研究が目立ち、A 渡辺修「『詞八衢』の評価と本居春庭の語学説」（『日本大学』『語文』55 昭57・7）、B 川戸昌「へ態」発見への道——『詞通路』まで——（『花園大学国文学論究』12、昭59・10）、C 島田昌彦「本居春庭『詞八衢』『詞通路』で目指したもの」（『論叢』）、D 同「本居春庭『詞八衢』の『四種の活の図』（『金沢大学国語国文』10、昭60・3）、E 渡辺英二「自他詞の意義規定」（『北海道大学』『国語国文研究』70、昭58・8）、F 同「詞のカード」と「自他」と「草稿」と——『詞通路』の成立過程——（『富山大学教育学部紀要』33、昭60・3） G 前田孝夫「『詞通路草稿』について 翻刻と研究」（『金沢大学国語国文』10、昭60・3）がある。

A は「詞八衢」の「受くるてにをは」がすべての活詞について統一的にその所属を決定するための「試葉」となるものであり、ここに春庭のすぐれた創意があるとし、B は詞の自他、さらに「へ態」を把握した初期のものとして「詞通路」を捉えて、それ以前の研究を考慮しつつ、春庭の限界性を指摘する。C は「自他のわかち」「詞天爾乎波のかかる所」を中心に春庭の独自性を論じ、当初の古典の解釈鑑賞及び作文作歌という目的とその手順方法をも一気になり越えたところに「詞通路」など春庭の業績の価値を認め、D は「てにをは紐鏡」「和語説略図」などとの対比の中で、「詞八衢」「四種の活の

図」を位置づけ、これまでの活用研究を統括・体系化したものとして、その優秀性を主張する。E は本居春庭の自他のとらえ方を初稿本から刊本に至る過程の中で捉えて、実例に基づきながらもそれを超える演繹的な態度でもって、体系の組織化を図り、論理的にも整合性のあるものを獲得しているとする。渡辺には、自他を扱ったものとして、他に「おのづから然る」と「みづから然る」——『詞通路』の「自他」（『国語と国文学』59—4、昭57・4）がある。F は「自他」、「草稿」、「詞のカード」を資料として、「詞通路」の成立過程を論じて、詞のカード——自他——初稿本——草稿——成稿本初稿本の順に成立したと推測する。G には翻刻のほか、自他の分類における「草稿」と付け木木片との関わり、「草稿」の意義規定に関する論考があり、「草稿」は資料「自他」よりも前に成立したとする。H 尾崎知光「『詞通路』における「兼用の事」について」（『愛知県立大学文学部論集』国文学科編32、昭58・3）は「兼用懸詞」に詞のはたらきの応用としての意味を見、「詞通路」の中の一章として意義づける。また、I 建部一男「近世文法研究書における『図』（『東海学』『国語国文』28、昭60・9）は、成章の「装図」、春庭の「四種の活の図」などの「図」の、文法研究書での利用について概観し、特に春庭以降、活用と文の構造との関わりに注目するようになってくるさまに言及している。他に、本居春庭、鈴木胤の伝記を連載する、J 足立巻一「本居春庭伝」（1）〜（4）（『日本語学』2—1—4、昭58—1—4）、K 尾崎知光「鈴木胤伝」（1）〜（3）（『日本語学』3—4—6、昭59—4—6）がある。

富樫広蔭に関しては、L 尾崎知光「富樫広蔭の文法學說——その主要点と春庭の學說の繼承にふれて」（『説林』31、昭58・2）、M 小林賢次「富樫

広蔭自筆本並びに自筆書入本「詞玉橋」について」(論叢)がある。Iは断止格を中心とする静辭の捉え方などに春庭を受け継ぎながらさらにそれを展開させようとする広蔭の姿勢を探り出し、Mは東北大学付属図書館所蔵の「富樫広蔭叢書」に収められる広蔭自筆本など六点を取り上げ、書誌学的・文献学的側面から解説・紹介し、そこから提起される諸問題を探ったものである。塚原鉄雄の、N「生川正香と芭蕉発句」(大阪市立大学「文学史研究」25、昭59・12)は論叢所収の「生川正香の芭蕉文法——翁発句助辞一覽——」の補訂の意味をもつ論文である。

四、雑誌論文等——文法Ⅲ——

明治以降の、近代国語文典に関わるものを取り上げる。A建部一男「稿本日本語典について」(「東海学園国語国文」27、昭60・3)は西周の「稿本日本語典」(明治三年)の文法研究史での資料的価値を論じ、その品詞分類の特色を、代名詞、動詞、形容詞の連体形、副詞・感動詞の扱いに認め、B同「言語構造式」の構造——活用研究史の問題として——(同上誌26、昭59・10)は谷千生作成の折図「言語構造式」(明治十七年発刊)につき、その特徴を国語の総合的説明にあるとし、品詞分類、文法用語における義門、鈴木胤などとの関わりや語学新書など蘭語系文典の影響を論ずる。C伊土耕平「文観念の発達と構文論研究の方法」(「学芸国語国文学」20、昭60・3)は文中の統一の位置をどう捉えるかに文観念の発達を見、呼応による統一観(統一一点ナシ)、中心統一観、文末統一観、全体統一観の四つの視点から考察し、D永野賢「言文一致運動と口語文法研究」(「金田一春彦博士古稀記念論文集」第一巻 国語学編、昭58・12)は俗語・口語文法研究史の

区分をその性格の上から七期に分け、言文一致運動に伴う口語文法研究を、その前後の時期と比較して、位置づけたものである。E北沢尚「明治後期の口語文典の諸相」(「国学院大学「国語研究」47、昭59・3)は標準語制定の機運の中で、各口語文典が言語規範となるべき口語文法を如何に整備しつつあったかという視点を依り、そこに見られる「口語」の規範的理解の揺れに言及する。F矢野文博「『広日本文典』の研究序説」(「東海学園国語国文」22、昭57・10)は「活用」の問題を取り上げ、G田辺正男「三矢文法と折口先生」(「芸能」26-17、昭59・7)は「高等日本文法」の特色を、独立詞、付属辭(助動詞—動助辭、テニラハ—静助辭)の二大別、文節に相当する「語」(詞—独立詞、または詞・辭の結合したもの)の設定に見、それに対し、折口信夫は文法を品詞論に限定していることを指摘し、その一端を「副詞表情の発生」(全集第十九巻所収)について論述する。島田昌彦の従来の構文論に関する批判、H「山田文法の構文論」(「金沢大学国語国文」9、昭58・3)、「橋本文法の文節による文の構造」(「金沢大学文学部論集」文学科篇5、昭60・2)について、Hは山田の、排列に於ける、装定する語の上行性、陳述に従属する部分の下行性や資格は用言に直上するという点、主語を用言に従属すると強弁する点を批判し、助詞に焦点を当てた、国語の文の構造に内在する法則を目指す構文論こそあるべき理論であると述べ、Iも「てにをは」の働きを重視し、文節は「てにをは」をその中に凍結させてしまうと批判して、文節によるよりも、島田の提案する生花型構造による方が正しく理解できるとする。

松下大三郎について、J徳田政信「原辭」の概念の成立と語構成理論」(「中京大学文学部紀要」19-1、昭59・6)は山田孝雄説と対比

しつつ論じ、その初期の理論から『改撰標準日本文法』における後期の理論への展開の様相にも触れ、「原辭」と「詞」とを区別したことが伝統的な日本語の「語分類」にかなうものであるとし、ここに西洋式品詞の概念に影響された明治以降の文法説との相違を見る。

K菅泰雄「松下文法における第二種形式名詞について」(旭川工業高等専門学校研究紀要)20、昭58・3)は第二種形式名詞の中の矛盾点(提示助辞の中の特提との関わり)を指摘し、L伊藤雅光「松下文法における『格』の問題点」(語学文学)23、昭60・3)は「標準漢文法」の、動詞一般格の疑問態・命令態に見られる矛盾を取り上げながら、デイクトゥム・モドウスの問題との関わりで、「標準漢文法」が果した、松下文法理論の発達における意義の大きさを指摘する。M根来司「時枝誠記博士の国語学」(国語と国文学)60-8、昭58・8)は時枝学説におけるフッサール現象学の持つ意味を論じ、現象学研究の蹉跌と、それに代わるものとして求めた、中近世の国語研究で培われた言語理論の研究の深化について、その経緯を講座本『国語学史』(岩波講座日本文学)から単行本『国語学史』に至る過程の中に見る。根来の時枝研究はN「時枝誠記博士の卒業論文——詞詮論とどう結びつくか」(国語と国文学)61-6、昭59・6)、O「橋本進吉博士、時枝誠記博士の文法論」(神戸大学『国語年誌』3、昭59・11)となり、さらに前述の『時枝誠記研究』として結実する。『日本語学』第1-5巻の中には大槻文彦伝(風間力三)、橋本進吉伝(金田一春彦)、山田孝雄伝(佐藤喜代治)、時枝誠記伝(鈴木一彦)が連載されている。

外国人の日本語文法の研究については、P松岡洸司「キリシタン時代の品詞分類——形容詞観について——」(上智大国文学科紀要)1、昭59・2)、Q熊沢精次「日本語学習書としての『ロドリゲス日本大文

典』の価値」(日本語と日本語教育)11、昭58・1)、R松岡洸司「オヤングレンの日本大文典の一側面」(上智大学『国文学論集』15、昭57・1)、S仁田義雄「初期欧文典・辭書に現れた品詞名」(京都教育大学国文学会誌)17、昭57・12)がある。Pは形容詞という独立した品詞を立てないラテン語文典に従うキリシタン時代の宣教師たちの日本語の形容詞の扱いについて、ロドリゲス大文典などを資料にラテン語の品詞の枠に強く規制されている様を説き、Qは「ロドリゲス日本大文典」の組織立て全般に目を配りつつ、名詞、動詞の活用・法・時、品詞論について、その実用語学書としての側面に注目する。Rはオヤングレンの文法研究の特色を、名詞の格・動詞の活用を中心にコリヤードと比較しつつ論ずるもので、名詞に関する表・時制についての独特な考え方に注目し、Sは今日の文法学で用いる品詞名の基盤となった欧文典・辭書十五点を資料に、その動詞の下位分類のあり方から、能動詞・所動詞・自(中)動詞の三分法と他動詞・自動詞の二分法の二類のあることを述べ、わが国の洋式日本大文典にもこの二類があったが、後者へと進展していったとする。

五、雜誌論文等——音韻、その他

音韻については、『韻鏡』を中心とするものが目に付く。中でも湯沢質幸の唐音関係の論文に注目したい。A「江戸初期韻学における唐音」(国語国文)51-11、昭57・11)、B「江戸期韻学における文雄の位置——唐音受容史からの接近」(国語国文)96、昭59・10)、C「江戸韻学の唐音受容——文雄以降の助紐字への唐音利用」(山形大学紀要 人文科学)10-4、昭60・1)がそれで、Aは江戸期の韻学における唐音の取り扱いや位置などについて、江戸初期の韻鏡注釈書(『韻鏡易解』など)

に見られる唐音の記述を通して考察を加え、Bは文雄が師太宰春台から受けたものを契機に、仏家としての韻学的素養・力量を発揮し、新しい唐音運用方法を確立し、その韻学上の成果をもって、江戸時代の韻学を飛躍的に発展させたとする。Cは文雄以降の韻書、「磨光韻鏡余論」（利三の孫、利法の補訂あり）などと対比し、助紐音に用いた唐音の受けとめ方に大きな差違のあることを明らかにする。いずれも文雄の唐音利用による韻学の飛躍的発展への寄与について述べらるるものである。

江戸期の韻鏡研究については、福永静哉のD「大田嘉方の韻鏡研究」一、同完（以上、「女子大國文」91、92、昭57・7、12）、E「韻鏡反切指要について」（「女子大國文」93、昭58・6）、F「湯浅重慶の韻鏡研究」上・下（「女子大國文」96、97、昭59・12、60・6）もある。Dは嘉方の「韻鏡遮中鈔」、「韻鏡指南鈔」など四点についての、書誌的な面を中心とした論述であり、Eは僧・周海の著、「韻鏡反切指要」について述べる。Pは西村（湯浅 重慶の「韻鏡求源鈔」「韻鏡問答鈔」などについて、その内容を詳細に紹介したものである。さらに、G高松政雄「呉音と等韻学——日蓮——」（「岐阜大学国語国文学」16、昭58・1）は近世初期韻鏡学に至る過渡的存在としての、日遠の法華経随音句を取り上げ、彼の呉音研究における、法華経読誦者として身につけた旧来の相伝音たる呉音と等韻学に依る理論音としての呉音との関わりに焦点を当てて論じている。

国語学史

小林明美の、H「円仁の長母音知覚」（「密教文化」141、昭58・2）はサンسكريットと円仁の表記とのずれについて、九世紀国語の音声の状況を踏まえつつ論ずるもの、寺田泰政の、I「国学者鱸有飛の音韻研究——「四十八音略圖」「四十八音義記」について——」（「金田一春彦博士

古稀記念論文集」第一巻 国語学編昭58・12）は標記の著述につき、その四十八音図の特色・国語史的意義を述べ、J同「鱸有飛」（「新居町史第三巻 風土編」第七章、人物）所収、昭60・3）は有飛の人となり・学問を略説する。K桑山周一「音韻・仮名遣書」「古言衣延辨」（奥村栄実著の成立とその継承加賀国字の二つの成果——（石川県高校国語教育研究会「国語研究」21、昭59・3）は「古言衣延辨」写本等十五点について調査した結果の報告で、諸本の解説、主たる写本五本の校合（抄出）などがその内容である。

仮名遣に関して、Lこまつひでお「定家仮名遣の軌跡」（「日本語学」3—5、昭59・5）は定家仮名遣を漢字を含めた用字全体の中での正書法的表記の試みと意義づけ、M白木進「かたことをよむ」（四）（「梅光女学院大学「日本文学研究」18、昭57・11）は表記の問題を「四つ仮名、は・わ、い・ひ、ゐ、う・ふ、え・へ、ゑ、お・ほ、合拗音」を主に述べ、N前田富祺「倭字古今通例全書」の時代的意義（論叢は「倭字古今通例全書」が「和字正濫抄」刊行以前に完成していたことを踏まえて、その特質を論じ、「倭字古今通例全書」がかえって当時の仮名遣観に適合するものであったことを述べ、その時代的意義を理解することの重要性を説く。O林義雄「古言梯」再考期攷」（上）（「専修国文」36、昭60・2）は「古言梯」再考本における、著者の補訂（再考）について、それを四次にわたるものとし、その版種と諸本について述べる。同（下）（「専修国文」38、昭61・1）はその各次における補訂について詳論する。P竹岡正夫「短信」成章のオラ所屬訂正の時期」（「国語学」138、昭59・9）は成章のオラの理解に言及するものである。

語彙関係の、Q白木進「志不可起」を読む」（「梅光女学院大学「日

本文学研究」19、昭58・11）は原本、著者、内容について詳論し、その内容を江戸詞を中核に関東語を集めた一大類書と規定している。R道井登「俚言集覧の小説語について——唐話との関係を中心にして——」（金沢大学語学文学研究）13、昭59・3）は俚言集覧の中の小説語の典拠、唐話の我が国の辞書に与えた影響を「畫引 小説字彙」などと対比することにより考察する。S後藤「一日」鋸屑譚の辞書の価値」（国学院雑誌）84—3、昭58・3）は本書の辞書の性格を倭訓栞との比較において論じ、倭訓栞に先鞭をつけたものとしての意義を認め得るとする。T犬飼守薫「国語辞書『官版 語彙』と雅語辞書『雅言集覧』」とのかわり（「相山国文学」）9、昭60・3）は木村正詳らの手になる官撰辞書で、近代国語辞書の祖として「言海」に大きな影響を与えた「官版 語彙」について、稿本から刊本への変容の様を標記の主題のもとに論じ、U同「国語辞書『官版 語彙』の編集過程」（「相山女学園大学研究論集」）15、昭59・2）は「語彙」の形成を考察する上での貴重な資料、国立国会図書館蔵の「語彙 伊部一 巻六」について、刊本との異同関係に基づき、刊本に至る経緯を推定する。V三宅ちぐさ「いろは字類抄」における意義分類の変遷とゆれ（「岡大國文論叢」）10、昭57・8）は「いろは字類抄」の諸本に関して、意義分類の変遷、人事・辭字門における分類意識について、三巻本「色葉字類抄」と「世俗字類抄」系を対比することにより考察するものである。W近藤尚子「『操觚字訣』の性格と字義弁別の方法」（「国語学研究与資料」）7、昭59・1）は本書の文字書としての性格を考え、字義弁別の方法を明らかにするもので、その注文の記述をもって、日本語を考えるのは本書の目的に適合することではないとする。X菅野洋一「難義と秘事——「ひをりの日」をめぐって——」（論叢）は難義語が秘事秘伝

の中に取り込まれていく過程、語義の解釈に与えた秘事秘伝の作用について、「ひをりの日」を例にして論じ、さらに、中古から現代までの、この語の解釈の変遷を描出したものである。仮名づかいの問題が語義の捉え方に関わるさまざまなにも触れ、興味深い。Y山内洋一郎「下一段動詞「蹴る」について」（論叢）は動詞研究史の中の「蹴う」「蹴る」を論じ、それを踏まえて、「蹴う」から「蹴る」への変化を考察し、Z今西浩子「『消息文例』考——国語学史上の位置——」（論叢）は藤井高尚の「消息文例」のもつ雅俗対訳的、啓蒙書的性格を中心に、「詞のしき波」や「かたこと」との対比を行い、その今日的意義を、類似語の識別に重点をおいた、深い考察に求めたものである。

文章について、a永野賢「文章のあゆみ」（「言語生活」）393 テクス ト論、昭59・9）は文章論を「文章」の論という意味で幅広く考え、江戸期の国学者の文章論から心理学者・言語学者による文章論まで五種に分けた上で、伴蒿蹊の「国文世々の跡」から山本忠雄「文体論の建設」に至る諸書を取り上げ、文章論の流れの中に位置づけて、概説する。

漢文訓読関係の、b小林芳規「古事記訓点史」（論叢）は古事記の訓読例を中世以降のものであろうとし、その上に立って、日本思想大系古事記で示した小林の古事記の訓読の方法（漢文訓読史の応用、古事記自体に存する用字法の原理に依る）に言及する。c勝山幸人「ラコト点と学派交流上の一問題——喜多院点・忍辱山点・明詮僧都の点——」（国学院雑誌）85—12、昭59・12）はこの三点の関わりを、忍辱山点は喜多院点を母体に仁和寺の点法を加味し、これを改変・整備したラコト点、明詮僧都の点は喜多院点の極めて古い形態を備えた点法を伝領し、

法相宗の訓読法や所伝を理解していた点法であると結論づける。d 平井秀文「倭訓類林」と「遊仙窟」訓（梅光女子学院大学「日本文学研究」17、昭57・11）は近世の辞書類への「遊仙窟」の訓の投影について、「倭訓類林」を例に論ずるもの、e 野村真木夫「改正読書点例」の位置（『文莫』10、昭60・10）は漢籍の訓読についての鈴木服の見解を記した「改正読書点例」につき、再読・待遇表現・動詞の自他の識別を中心に論ずる。なお、「改正読書点例」は「文莫」9（昭59・7）に復刻・影印があり、尾崎知光の解説「改正読書点例」について」が付されている。

抄物関係の、f 柳田征司「抄物言語研究の回顧と展望」（『愛媛国文と教育』13、昭57・6）は抄物言語の研究の歩みを抄物の発掘調査・言語研究への活用・作者の伝記的研究・本文の複製などが行われた第一期・湯沢幸吉郎などの語法の体系的記述をなした専著が刊行され、書誌学など、他の学問分野からの、抄物への関心が払われた第二期、抄物の言語資料としての資料的性格の解明が重視され、資料の発掘・整備も格段の進歩を遂げた、第二次大戦後から今日までの第三期に分け、それぞれについて詳細に述べていて、抄物言語の研究を志すものにとって有益である。

なお、末筆ながら、昨年末に急逝された故竹岡正夫氏の御冥福を祈り、謹んで哀悼の意を表する。

——福島大学教授——